

(史料紹介) 尾張藩海防史料「赤心秘書」についての紹介・翻刻

長 屋 隆 幸

「赤心秘書」について

「赤心秘書」は、尾張藩伊藤直之進藤景が尾張藩重臣へ差し出した、或いは差し出す積もりであったが何らかの理由で取り止めた、軍事に関する上書の類を集めたものである。現在、愛知県図書館が所蔵しており、1巻から5巻まで存する。第1巻に付された巻頭言によると、本書は藤景死去後、尾張藩が「国家裨益の書」とであると聞き、ある家にあった蔵本を写しとり官庫に収めたもので、書名は藤景が名付けたものではなく、後世の識者が付けたとされる。さらに、原本は1冊だったが、読覧の便を図り書写する際に5冊本に改めると共に、目録及び各条に朱書きを付したとある。

本書巻末に付せられた系譜によれば、作者伊藤直之藤景はもともと大垣藩士であったが、故あって浪々の身となり名古屋巾下で浪人生活をしており、その後安永7(1778)年に高須藩へ仕官し、寛政元(1789)年に尾張藩へ歩行格で召し出された人物である。彼は軍学を嗜んでいることが評価され、文化5(1808)年に小十人格に昇進し、文化8(1811)年に死去している。彼が嗜んでいた軍学は、戦国大名甲斐武田氏の戦いを教授すると謳っていた甲州流軍学であったとされる^{*1}。

なお、本書を所蔵している愛知県図書館は、ホームページ^{*2}上で次のように説明し

ている。

尾張藩の下級藩士であった伊藤直之進藤景が、九代藩主宗睦の時、藩の重職にあてて書いた意見書。寛政初年の外国船の接近、漂着を契機に書かれた藩域の防衛に関する意見を始め、兵法、築城から藩政の様々な事柄まで内容は多岐にわたる。元来一書にまとめられたものではなかったが、藤景の没(文化8年)後に複数回の上進書の草稿から写されたものとされる。姉妹編ともいべきのに『講武秘書』がある。幕末に藩の御日記所に収めるために書写され、その際目録と「伊藤直之進家系」を付した。

また、同HPでは、鶴舞図書館に「赤心秘書」とするものと「伊藤直之進上書」とするものがあるとも記載している。したがって、大正4(1915)年発刊の『名古屋市史』政治編二^{*3}などに根拠史料として引かれている「伊藤直之進上書」なる史料は、「赤心秘書」のことである。

本書の内容であるが、愛知県図書館のHPにもあるように軍事向きなことだけではない。たとえば、名古屋における火災への手当方法についても述べている。また、俵約による経済縮小に伴うデフレ状況を批判し、その解消のために当時禁じられていた飯盛女を熱田宿や岐阜に置くことを許可すべきと主張し

ている。すなわち、領外の人間に金銭を使わせて領内に金銭が留まるようにして、領内をインフレにしようとする施策である。さらに、飯盛女を置けるほどではない小さな宿場では、芝居興行によって外貨獲得を行うべきとするなど、経済に関しての記述も見られる(五巻)。また、藩内で軍用が軽視されている様子を嘆き、手代あがりなど算用に秀でた者が中心となり節約を行い、家臣の削減などが行われていることに苦言を呈したりもしている。特に藩校明倫館が出来てから武芸が軽視されていると不満をもらしている(二巻)。

このように、上書の内容は海防や軍事に留まっておらず多岐に渡る。そのため、本史料を読み解くことで、軍学者伊藤の思想のみならず、尾張藩が抱えていた軍事的な問題、さらには当時の名古屋における社会や世相を明らかにすることができる。もっとも、本史料は五巻本となる大部な史料である。そのため、翻刻がなされていない状態で全体を読み通し、分析を行うのは困難である。そこで今後の研究に資するため、この「赤心秘書」を数回に分けて翻刻を行うことにした。今回は、第1巻「一 徂徠問答并異国船漂流之節海陸共備方」から「一 寄合組之事」までを翻刻した。以下、各箇条ごとに簡単な解説を示すので参考にいただければ幸いである。なお、旧字・異体字などは原則常用漢字に直した。また、合字は開いた。

翻刻箇所の解説

本史料の最初の箇条「一 徂徠問答并異国船漂流之節海陸共備方」は、荻生徂徠の書いた「徂徠先生答問書」の一箇条を紹介している部分と、異国船が漂着した場合における藩の手配方についての上書について書かれた部分の二つに分かれる。前者で紹介されている「徂徠先生答問書」は、享保10(1725)年の数年前に儒学者荻生徂徠によって初学の段階

にある出羽国庄内藩酒井忠寄家臣水野弥兵衛と匹田族の質問に答える形式で記された儒学書である^{*4}。『荻生徂徠全集』6巻^{*5}所収の「徂徠先生答問書」(底本は享保9年の服部南郭の序と翌10年の本多忠統の序を載せた上・中・下三巻本)と比較した所、伊藤が「赤心秘書」に引用した箇所は、中巻8箇条目の、新たな事を闇雲に実行することを戒めた箇所であったことが確認できた^{*6}。なお、「徂徠先生答問書」と「赤心秘書」の引用を比べると「身の内ニ疝氣つかへも痰も有之」との部分と、「身之内ニ疝氣も痰も瘧も有之」などのような異同のある箇所はあったが、文意が異なるような違いは見られなかった。

次に異国船が漂着した場合における藩の手配方についての上書部分であるが、これは軍学に詳しい伊藤に対し長野八郎より諮問があり、伊藤が作成したものである。ただし、提出前に病中の竹中彦左衛門に見せて相談した所、提出を見合わせた方が良いと言われて提出を見合わせたものである。ところで、「藩士名寄」によれば、知行1200石で父八助の跡を文化元(1804)年に継ぎ、文政5(1822)年から八助を名乗った長野鍋吉なる人物が確認される^{*7}。また、文政4(1821)年に彦左衛門を名乗るようになる竹中内膳(知行高800石)は、文化7(1810)年に死去した父彦左衛門の跡を継いでいる^{*8}。伊藤が死去したのが文化8(1811)年なので、彼らの父親達が「赤心秘書」に出てくる長野八助・竹中彦左衛門と考えられる。それを踏まえるならば、本上書は長野鍋吉が家を継いだ文化元年以前に記されたものとなる。なお、残念ながら、「赤心秘書」に出てくる長野八郎、竹中彦左衛門の役職については不明である。

本上書で、伊藤は漂流船漂着時における防備計画において、陸戦の用意がないのは不都合なので陸戦の用意を行うべきであると主張する。なぜ陸戦の用意が必要なのかについて、伊藤は異国船漂着にかこつけ、幕府が尾張藩

の軍備の状況を探りにくことを懸念してのこととしている。そのため、尾張藩が油断をしていないことを示すために、本来家臣が用意しておくべきであるが、実際は用意されていないであろう旗・指物や士分用の御貸具足を藩側で用意しておくべきと主張し、かつ非常時には、士分が借金の担保として町方に預けている甲冑を藩士へ返却させることを提案している。さらに、知多郡へ馬廻組を派遣する際の心得や軽車に大砲を乗せて運用することなども主張している。

次の「一大番組之事」では、尾張藩がそれまで組により人数が不定であった大番組の人数を、軍学の影響で1組を50騎にしたことについて、柔軟性に欠いており、かつ他藩からみて軍学に依拠して俄に軍事編成を行ったように見えるとして批判している。なお、この条文中に「孫子の法ハ曲制官道主用なりと御座候」とあるが、これは中国古代の兵法書「孫子」の始計に記された戦争に勝利するための5つの基本条件の1つであった法について述べた「法者曲制官道主用也」（法とは軍隊の編成・規律・装備を整えること）を指している^{*9}。

「一 五人組之事」では、士分を常に五人一組で行動させておき、戦場でも助けあい円滑に戦闘を行えるようにすべきと主張している。伊藤が身につけていた甲州流兵学では、五を単位を基本単位の一つにしていた。甲州流軍学の祖（又は中興の祖）である小幡景憲が著した『甲陽軍鑑抜書前集』備組或諸軍見聞能懸引三ヶ条に「第一、備一手形儀は、其の侍大将の一心なり。付備定の本は五人より初て廿五人なり。是從り五十人を分て、二組と為す。是從り五百人はを二百五十人宛分て、二備と為す」^{*10}とある。

「一 寄合組之事」では、伊藤は以下のような批判をしている。まず、大番組の編成替えなどにより藩士350騎程が非役の寄合組に入れられ、定まった頭も置かれていない。そ

のため、日頃、学問・武術などの芸能を身につけても、それを報告する頭がないため藩に知られることなく日の目を見ないことになる。また、いざ出陣となった際に臨時で頭が置かれ、急ごしらえで組編成がなされるが、日頃から互いに意思疎通を行っているわけではないので十分な働きをすることができない。このように批判しているのであるが、実際、伊藤が主張するように、このような臨時に行われる軍事編成はうまく機能しないことが多い。寛永14（1637）から翌15年の島原の乱で、熊本藩では臨時に藩士から選ばれた物頭に郡筒と呼ばれる郷足軽を配置した足軽隊を臨時に何組か編成しているが、多くはまともに機能せず戦果をあげることができていない。中には、物頭と郷足軽が途中ではぐれてしまったケースも見られる^{*11}。したがって、伊藤の主張は、決して的を外したものであると言っていることができる。

翻刻

「赤心秘書一」

此書ハ 明公御代伊藤直之進藤景重職への告言なれば元より世に普く知へきものにあらす、然るに有志古老の伝説に国家裨益の書たる事を聞及ひしかハ此日或家の蔵本を以て謄写し御日記所の官庫に収ぬ

因に云ふ、此赤心秘書の題号は後の識者追名せしよし并原本ハ一冊なるか読覧便利のため今度分ちて五冊とし目録を造り毎條に朱書を加べし也、且藤景か事実を知む為其家系を巻末に附録す

嘉永三年庚戌六月

赤心秘書第一目録

一 徂徠問答并異国船漂流之節海陸共備方之事

一大番組之事

一 五人組之事

一 寄合組之事

一 御軍用ニ可立士之風俗之事、他国ニ而文武

之分有事

一御中間之事

一御軍用を申立候輩座席ニ而申候得ハ尤之様
ニも可相聞候得共、業ニカゝり無心元相
見候事

一相印之心得違之事、相印ハ敵之紛れ者を可
致吟味為之事

一段橋を上り御堀を船ニ而越候事

一御城裏段橋より御座之間近く江入候事御不
用心ニ相見候事

一犬山城人数少ニ相成候事、尾張ハ古より盜
賊之張本有之事

(朱書)「徂徠問答并異国船漂流之節海陸共備
方之事」

一徂徠問答書ニ申候ハ、被仰下候、御政務之
儀御尤之様に相聞候得共根ニ入不申候、聖
人之道ハ天を敬ひ祖宗を敬し候事を本ニ
致候、天より理属被成祖宗より伝たる国
を自分の物と思召候事以之外ニ候、古よ
り祖宗之法ハ改ざる物と相見候、開国之
時に御生被成候ハ、如何様共御心次第
ニ候得共、御先祖より伝り候国を御心儘
ニ法を御立候ハ自由之至り是御先祖を御敬
し不被成候と申計ニ而無之、其害甚敷事
ニ候、其子細ハ新ニ国を給り諸侯と成る
人ハ新ニ城取屋敷取をして家を造ること
くニ候、先祖より持伝たる国を受取たる
人ハ人の造たる古家ニ住か如く今其古家
之住居を仕直シ候半事ハ如何様ニ直シ候
共元來の物数寄別ニ候故、十分ニ能ハ直
され申間敷候、爰の柱をふきかしこの引
物をとれと当分之物数寄ニ任せて直し候
時ハ思之外にも所の根駄をち悪敷なる事
多き物ニ候、愚老こときの貧者の古家に
住なれ候者ならてハ此たとへハ御存ある
ましく候、又愚老こときの年もはや五十
ニも成候人の身之内ニ疝氣も痰も癰も有
之、氣血も弱く成たる人をたとひ扁鵲ニ
見せたりとも甘計の比の健さには返され

ぬ物ニ候、身之内に久敷有之候病ハ如何
様ニ療治いたし候而ものけられぬ者ニ候、
卒忽なる医者ハ当分の見所ニ任せこと /
＼く治さんと致候故、病を癒し不申元氣
をそこなひ却而命を縮るる多く候、此道
理を能く會得仕候得者祖宗之法ハ改めぬ
物と古人も被申候、誠ニ名言ニ候、治乱
盛衰之道を御明らめなく人情世態に熟練
なく候而当分のは是非目前之利害を思ひ候
分ニ而国の古法を改むる事ハ不宜候事の
至極ニ候、民ハ習に安んずる物ニ候、久
敷仕馴候事ハ数代之前より致来り生れぬ
先より染込候事色々たとへ悪敷事にても
勝手宜敷物ニ候、世界の人ハ相持なる物
ニ而彼是融通いたし一貫ニ候故年久敷仕
馴れ来り候事ハ方々ニ根さし広かり、夫
ニ年寄候而人の得用も多く候、夫を急に
改め候へハ所々ニ思ひ之外なる欠斜出来
いたし候事思慮あるべき儀ニ候、周公深
く物を思案被成候事書伝に見へ候、聖人
の智ニ而ハ左も有間敷事ニ候、殊ニ開国
之初ニ候得ハ御心忝に御制作ハ成可申さ
へも如斯ニ候ハ如何之儀ニ候哉、是非を
理の忝に御拵候者眞の是非ニ而者無御座
候、皆手前之物数寄ニ罷成候、御懇意ニ
付申進候と有之候

異国船漂流沙汰ニ付長野八助方より了簡
之趣内々被相尋候ニ付、私存意之趣左ニ
相認候、後々之御調と余り齟齬仕候付此
事も奉申上候

先達而異国船漂流ニ付林小八郎を以長野
八助より被申越候、私了簡之趣相尋られ
候、然候処其節船之事計ニ而陸の御手当
無之候ニ付、陸の御人数之儀ハ如何ニ相
成候哉之旨長野方へ相尋候処、陸の御人
数ハ無之候段被申候、其節申上候ハ私先
師ニ承候ハ海辺之防之為番舟杯差出候節
ハ必陸ニ正兵之備を設ケ船ハ奇兵之心得
を以船と陸との恰合を能いたし、敵船を

防不申候而ハ難相成、勿論其節海之儀深岸之様子ニ随ふにて、或ハ船備を設け、又ハ陸ニ備へ、或ハ遠浅之所ニハ水柵を用ひ、見切之能き地形ニハ大筒を仕掛置候事之旨申候、其節長野方被申候ニハ、左候ハ、御馬廻之拾四五人も差遣し可然哉之旨に付、私了簡ニハ陸ニも御馬廻之組も不被遣候而ハ相成間敷被存候ニ付、先罷帰了簡之趣相認可差上段申候而、夫より先直ニ竹中彦左衛門方ニ逢、此節不快ニ而引籠被居候、前件之趣以私了簡之趣も粗申候、至極尤ニ候間御年寄方江も出候書付ニ候へハ迎もの事ニ念を入れ御人数之急ニ出され候様ニ書立而差出可申候、伊賀守殿御懸リニ候得ハ出来次第ニ差出可申旨申され候ニ付、夫より昼夜三日程相懸リ御馬廻一組四拾人程之組ニ組程差出され候積りを仕、其節江戸表御役人ハ海辺を巡り、相州小田原迄被参候而、夫より駿河・遠江・三河・御当国江参られ候旨ニ付、十日程ニ諸事備り不申候ハ而ハ難相成、其上江戸表御役人国々御廻被成候事も国々ニ而之武備を見ん為ニ異国船ニ事寄せて御役人を御廻し被成候事と奉察候故、可成丈ハ御家ニ非常之事も兼而御心得有之候様ニも為見申度、尤昔元正天皇之養老三年初而按察使を御廻し有之、是を狩之使といふよし定而鷹狩なといたしなから廻り候事ニも候哉、左様之事を奉存候而ハ尚更不都合成事有之候而ハ御外聞ニも拘り候へハ、ならぬ迄も内事にハ武備之御事も無御油断見せ置申度候故ニ色々と工夫をめくらし、先第一ニハ大坂御陣後三百年越故ニ其節之事ハ慥ニ不被知、譬其大概相知れ候而も是又時に宜敷ものなれハ難用候ニ付、御旗ハ其節之御旗に有へく候へ共、御円居などハ決而有之間敷奉存候ニ付、御馬廻組之御円居・四半之御幟ニ葵御紋を付ケ、下ニ易之八卦を一組にて二分而御家中其備之分ニ

指物も御円居と一緒にいたし、白地ニ上ニ黒く八之字、下ニ易之卦を書、乳付之處ニ銘々之姓名を相書、其一手之分ハ御足輕ハ袖印ニいたし、白地ニ八之字を付、其下ニ其備之易の卦を付、笠ニも八之字を付て不残揃へ、長柄御中間も笠に八之字を付て萌黄色ニ羽被ニ白く八之字を付、従者之若党も具足之上ニ萌黄色白く八之字を付、従者之中間も残らす紺之羽被ニ白く八之字を付、笠の後或は羽被の裾ニも其主人の物数寄有ても可然、一組ツ、一対差物之心得ニ而、先一番・二番之御馬廻御出被成候積りを仕り候而、此纏・御家中一対差物・笠験・袖印・羽被ニ至る迄絵図ニ相認、表立而染候而ハ不宜之故ニ、極内ニ紺屋を御深井之御庭之内へ呼寄、御庭内ニ而染させ仕立出来仕候へハ誰人知る人もなく、甲冑も過半持合候者も稀ニ被成ニ候得者、是又御借渡相成候積ニ而、尤罷出候面々其頭へ夜分招呼候而至而内事ニ而被仰渡べきニハ久敷御渡世ニ候故、武具等も銘々乳縄ニ合候甲冑を持合候輩も先ハ有之間敷候得者、若々乳縄ニ合候甲冑を拝借も致度候ハ、其乳縄を取、其乳縄ニ銘々之姓名を書付可被差出、或武具修復ニ町方へ遣し置候歟、又ハ屋敷ニ土蔵無之町方の土蔵ニ預ケ置候輩も候ハ、無程御触も出候ハ、各より申遣候に不及、先々より屋敷にて江可相届候、従者之笠・具足・羽被ニ至迄御渡ニ成候へハ其心得可有之候旨申聞せ、扨町々江ハ御家中之輩江金子取替武具等預り候者も候ハ、早速其屋敷／＼江可差戻候、取替置き候ハ、代金ハ追而御吟味之上其者江可被下候、若差戻候儀滞遅いたし候ニおいては厳敷御仕置ニ被仰付候旨、或ハ又武具之直段等は迄之振合も候処、無心得格別ニ引上候者有之候ニおいてハ是又御吟味申付候、惣而町方其他所他国より武具買込御家中へ売買候儀ハ不苦

候、是迄持合候武具之類何ニ不依他領江壳候儀堅致問敷候、其外御家中へ被仰出候号令之草案、知多郡ニ而小屋割之大概、兵糧米ハ其所／＼江御代官より差出させ、塩味噌其外諸色ハ其所之長百姓ニ申付候積等ニ至る迄大方出来仕、此竹柴を以御評議之上、重御役人方之思召も有候べき御儀とも候哉と相認候旨ニ而、先竹中彦左衛門方江差出候、其申候達ハ御備之意ハ知多郡海辺向ハ都而山多く候へハ、騎戦ハ不相成候へハ、烏雲之山兵之意を以、頭・奉行之外ハ皆歩行立之心得、四十人之御馬廻壺組を拾人ツ、一隊ニ定め、四段ニ分チ二組ニ而拾人ツ、之隊八隊ニいたし、海辺ニ出たり、又ハ山へ押上ケたり致候而、聚散分合を能して江戸御役人之見分を請、実ニ異国船漂流ニ而知多郡或伊勢海江も相見候ニ至候而ハ御馬廻組も追々ニ知多郡へ御差出ニ而、右之辺地形を見立テ時之要害を構、能見切所ニ而ハ遠候を置、大筒を仕懸、地形ニより柵を付、堀切をいたし、異国人船より陸へ上り候ハ、右ニ申候通烏雲之山兵之意を指て、或ハ防キ、或ハ守り、或ハ裏ニ働、又ハ夜ニ紛れて火戦を用ひ、船を奪、地利を知らぬ異国人なれハ如斯相成候へハ不勝といふ事有間敷、其上ニ先達而私工夫いたし置申候名古屋荷車を軽車ニ仕立、車之上ニ少キ櫓を乗せ幕を張、其内ニ大筒を入、常々車を推て渡世いたし候強力之鳶之者共ニ背ニ大身之獅之槍を為笈、此軽車を為推、鳴海・大高其外之平場之地形を見立、五百も千も此軽車を居て、異国人若知多之防を破て御城下江も参候様子ニ候ハ、此軽車之備ニ而打ひしき候心得迄もいたし、其上和漢之軍書ニも眼ニ東南を見て心を西北ニ置とも候得ハ、只異国船之事のみニ相成、海辺向ニ心付候内ニ若々御領分之内西北ニ盜賊之一揆も起るへきも難計候へハ、御城内之

御守方御城下之御固メ、西北ハ木曾川を境、境東ハ三河境、南海辺通ニ至る迄御手配し候事迄も相認候而、此上ハ若々私了簡ニも被仰付候ハ、早速知多郡江参り、地形を能見立不申候而ハ御防方計守方も慎ニハ難申上候旨相認、小生紙卷三巻程ニ書記彦左衛門殿江申候処、彦左衛門答ニ今晚得与一覽いたし可申、乍御太義儀日参り呉候様ことの事ニ而、其翌日参り候処、得与一見致候処、残候処もなく理ニおいて至極ニ候、我等出勤さへいたし居候得ハ、譬此事邪魔を致し候面々も有之候而も上之御大事之儀ニ候へハ御年寄方江も押而も可申上候得とも、何を申候も引籠罷在候事故、迺も此事通る間敷候得者、只一通り陸之御人数之御手当も有之候方可然哉と御認、長野へ御出し候方ニ被存候、是程之事を致反古事歎敷候得とも、折を以上江ハ可申上候、拙者より其元之事を申出ルはとかく上江直之進を最肩致候と取れ候、全其元を最肩致ニあらず、其元之芸能を御用ニ立度故ニ候、其事をしらす外を求メ候事も氣之毒成事ニ候へとも、是も時運の然らしむる事なれハ不及是非候、当時左程ニ慥成事ニも無之候得とも、弥異国人扶桑国を奪んといたし候様子ニ相聞候ハ、其時ニ至り何之猶予可致候哉、直ニ此一書上江入御覽、御年寄衆江も強而可申上候も、夫迄ハ暫相見合候方可然候段被申候、依之長野方江ハ彦左衛門方了簡之通相認差出候、其節長野被申聞候者事大きく成候へハ、佐久間・棚橋江も可及相談候へとも、内事故ニ其元江申候旨ニ候、私も此一言存念ニ不応、夫よりハ軍事之儀ハ不申候十一月朔日頃より異国船漂流之御手当之御評議ニ成、翌年二月下旬ニ漸く山田河原出張ニ成候事

欄外 1

「具足之其人之胴ニ合不合ハ乳通ニて廻を取ル事故、是ヲ乳繩と云、此乳繩ニ合不合の事ハ実者不勝手之輩ハ質屋江遣置候事も有ものなれハ、其人の胴ニ合不合之事を以拝借ヲ済候事、是士を辱しめさる致方ニ候」

欄外 2

「此武具之御触無之候故ニ町方へ質物ニ遣し置候輩ハ至而難儀相成、其上具足ノ直段日々と高直ニ相成、二両二分計之具足十両ニも難買、其内ニ御家中之内大分具足を売買いたし候輩出来致し、金もふけ致シ不都合なる所行多く相成候、其節濃州加納或ハ彦根・大垣辺ハ皆町方へ触出し候故ニ質物ニ取置候具足・馬具何ニ而も直ニ其屋敷へ町人共持参之由、此事無之候故困窮之御家中俄ニ過分之金子を出し武具買求し故ニ益難儀ニ相成候」

欄外 3

「異国之軽車之ことく取廻し能様ニ致し候」

(朱書)

「大番組之事」

一惣而軍事ハ是迄其手当無之事ニ而も常ニ能調置たることく内証之事を外江見せず、内をしくらたむ候事武の本意候、此故に年始其外慶事ニ用ひ候土器も内くもりの盃なとと名付て盃の中を黒く致候類、武備之心得ニ候故ニ備ニ立たるも其備のしぐらミて見ゆるを勝色といたし、城内も樹木多くしぐらみ候を好み、あかるくしられ候ハ嫌敷候、然るに異国船漂流之御沙汰有之候而俄ニ御人数之御組替有之、是迄御馬廻組ニ而済来り候を大番組之名目ニ成、五拾騎ツ、ニ被成候事何故ニ候哉、譬漂流之御沙汰無之以前ニ御組替之御内調有之候とも、既に軍事之ふり合も候ハ、其事を止て久敷有来り之通ニ而御人数出し被成候事こそ他国ニも賞美可仕

候ニ、中国公方ニも奉申上候、御家ニ事ニ臨て大番組と名付五拾騎ツ、ニ御組直シ之事御外聞も不可然候儀ニハ無之候哉、小身之大名衆ニ而も如此事ハ仕聞敷奉存候、是迄之御家ニて御武備無之様ニ見へ候而内々あかる外へ顕れ候様ニ奉存候、其源を申上候ハ、御軍用を申上候者五拾騎一陣と申事ニ泥ミ青表紙之軍学ハなれかたきより如此事ニ相成候、此五十騎一陣と申事も伍之生数を十ヲ合せらる之事にて甲州ニ而も五拾騎以上之士を預るを侍大将と云、其器量次第ニ而士を多く預けられ候事ニ而高坂弾正ハ七百騎之士大将也、如此事故ニ五拾騎ニ而なけれハならぬと云事曾而なき事なり、是迄之通御馬廻組四拾騎程にて随分可然事ニ候、若其時ニとり大組ニいたし度候ハ、其四拾騎相備を付て五拾騎ニも六拾騎ニもいたし候而宜敷候様子ニ分合以て変をなすと有之候、尤戦に臨て敵の様子ニより我人数ヲ或ハ分、或ハ合テ戦事ハ勿論なれとも、常ニ人数組を致し置候も三拾騎・四拾騎・五拾騎ニ組立て置たるも夫ヲ其通ニ用ひねハならぬと心得候而ハ死物ニ候、是迄久敷其通りニ済来り候御馬廻組同心之類を俄に異国船之御沙汰の有之候連一日百人・式百人程ツ、御組替ニ成、極月の世話敷時分ニ百人も被為 召大御番組ニ被 仰付候儀、此大家之有へき儀ニ候哉、其上組分をして其頭々を付置候主意を不存事ニ而、是迄孫子の法ハ曲制官道主用なりと御座候事ニ而、伍を組不申候而ハ分合も不相成、備之働キ前救合も不成候、其源ハ其頭々ニ能親附為致置候而進退懸引頭々自分之手足之ことく遣ひ候様ニ可致為ニ候、此手足のことく組子ヲ遣ひ候事ハ何ニ而遣れ可申候哉、常平生之時ニ恩信を以組と頭との間を能親ませ、此頭之下知ならハ誠ニ火の中江も飛入へきとおもふ程ならてハ命懸之働ハせぬも

の二候、左候へハ組子之一大事ハ頭ニ親附致候事ニ候、同心も御馬廻も代々能組合て頭之恩も請、親祖父より相組なとし、其根もかたく存居候者を、鎖細なる五拾騎に組直したき故ニ不殘引離し、新ニ組替候故散乱いたし候、是迄ハ大身之衆中ニ同心七騎・拾騎と小割にして附置れ候、是又其根ハ小組にして置、大組ニいたし度時は幾組も合て相備ニ而働かせ候御積リニ候、今般之異国船漂流知多郡之山多キ所江之人数立ニハ打て附たる事ニ而、同心拾騎程ツ、ニ而鉄炮或ハ長柄を組合て如此之組何拾段も候ハ、自然と鳥雲之山兵之意ニ可叶候、残念なる事ニ相成候

(朱書)

「五人組之事」

一曲ハ郭曲にて五人ツ、段々ニ組上ケ候事ニ而、伍ニ伍長、卒ニ卒長と頭々を付え働するなれとも、和流には如何いたし候事ニ候哉、足輕のミ伍組の事有て、長柄隊・士隊ニハ其事なく、式拾騎・式拾五騎ニ組頭壹騎ツ、附て夫を二隊にいたし、真中ニ細筋を明けて侍大将床几本より向迄差支なく見通さる之如く立るハ通例也、然るに士にも五組之法なきハ不宜、士も常々五人ツ、組合をいたし置、同組之内ニも猶更別懇いたし、其内之人物之能キ芸能の士を五人の長と定、若き者之芸能心懸もなき者不忠不孝等ハ異見を加へ、知行取続す或ハ無扨子細有之二おみてハ五人相互ニ救合、出軍之節も此五人ハ不離進退を同しく致故ニ、四拾騎にても五人ツ、八隊ニ成候而働候故ニ討死すべきも討れぬもの也、常々能親ニ候故ニ後影其人の声ニ而も誰と聞分候事なれハ、武具着用いたし候へハ人々見分もなりかたきなれとも、平生一緒ニ心易く致人故ニ、乱軍ニ成而も先ハ五人ツ、みたれぬと申候、五人之内ニも或ハ武芸を能する士も有、又

武芸ハ左程ニなくても力量の強い士も有、勇者も有、臆病者も有、弓の上手も有ハ鎧之上手も有、長刀を遣ふ者も有ハ、太刀の上手も有、鉄炮の打手もあれハ、馬の乗手も有なれハ、侍大将となりてハ夫を程能く組々相互ニ離々にならず働する也、侍大将となりてハ四十騎なるも五十騎ニ而も其士の銘々の気性或ハ其芸能を能見分ニて、右ニ申候ことく内輪之五人組合をいたさねハなりかたし、五人の士之内壹人討れ候跡ハ残り四人ハ死物くるひと申ほどニ働て、其敵を打留候心得、また組頭討死程にいたれハ二十五騎之士ハ皆組頭と同様ニ討るべき心得にて働き、侍大将討れるべき程ならハ五拾騎の士ハ不及申、其一備の者必死之戦をなす程ニなくてハ不相成候故ニ、戦闘之事ニて重キハ士を預り候ニ優り候事ハ無之候、当流も突衆之外れ者と名付候而引揚候ニ一かたまりニ成て退くを突衆と云て賞美いたし、独二人ツ、はら／＼と退をこほれ者と名付て不覚と定る也、畢竟伍人組之法明らかならざるよりこほれ者の不覚ハ生る也、此故に古書ニも伍法明らかならざる時ハ隊法不立と有之候

寄合組之事

一新ニ是迄之姿御組替被成候付、大番組ハ五拾騎ニ相成候得とも、其余三百五拾人程之士ハ寄合組ニ成、是も定りたる頭なく大身の面々月番持之裁許ニ相成候、前ニ奉申上候ことく組々頭と能親附不致候而ハ難成事なるニ頭も組も非常之時ハ誰を可頼哉、是程大事之出来事ハ無之候、三百四五十騎にてハ式拾万石余之大名之人数ニ候、其人数浮人ニ罷成候、孫子ニ申候通り頭ニ頭を付、又其頭ニ頭を付而さへも物毎難行届、是を定りたる頭もなければ芸能を働せ候人もなく、芸能有之も申立る頭もなく、相互ニ当座遁に其月其日に何事もなき事をのミと心得、又

三百四五十人の輩も何様芸能ハ励候而も慥成頭なけれハ申立て呉る人もなき事を知りて実ニ芸能ニ身を入候者も無之、日々月々芸術も情慥ニ相成可申候、寄合組之輩三百五十人程軍事ニハ其時ニ取て其頭ニ被仰付候、夫々江御割付被成候御事と奉存候へとも以之外心得違に候、常々能組分ヲ致し、其頭に能親ミなつき候様いたし置候而すら何事之異変ニなれハ手もつれあるものニ候由申伝候ニ、其時ニ臨て差懸り此壺組ハ誰へ随ふて働くへし、此壺組ハかれに随へと三百五十人も有之候御人数をあちこちといたし候内ニハ何事も手おくれニ成、迅速之事ハ一つも出来間敷候、夫故人数ニ頭を附段々ニ組立置事ニ候、何之為となれハ急応之為ニ候、惣而軍学未熟之輩ハ敵ハ遠国より来ると計心得候、遠国より来る敵ハ苦ニハなり不申候、おそろしきハ御城下御膝本より起たる敵ニ御座候、左様成候節ニ成候而ハ俄ニ組分ケなりへき哉、実ニ上を大事ニ奉存候ハ、此所ニ身を入考たき事ニ候、大勢之人数有之も仕方悪けれハ皆手もつれと成て非常之急応ニハ一つも御用ニハ立申間敷候、如此三百五拾人も浮たる御人数ニ成たる事ハ兵の節制をしらざる誤より事起りたる也、其節制を不知ハ実に軍学之大事な心付不申候、只和流之先祖より申伝候書のミニカ、はり夫ニ而事済可仕とおもうふて活物之事ニ心付不申故ニ候、兵之節制ハ人数ニも節制有、城ニも節制有、小屋割ニも節制有、地形ニも節制あり、何一ツ節制を離れてハ難成候、譬ハ三百五十人之御人数ならハ三拾五人壺組といたし、此三拾五人之内鉄炮頭式人・長柄頭壺人・使番・目付之類、平士三十騎、如此十頭に与頭ヲ添て組立置候を則兵之節制と申、尤旗・纏・馬印一對差物之類迄皆備／＼混雜なき様ニいたし候事ハ能節制にあらされハ難成候、又城

ニ而節制を申候ハ、本城・二之郭・三之郭と段々城制いたし候而も三重ニ堀を堀、土居を築計ニ而ハ外郭・三之郭破れ候へハ二之郭之四方ニ敵廻り、二之郭破れ候へハ本城之四方ニ敵押廻り候様ニ成而防戦之利以之外惡敷候、然るに三之郭ニもいくつニも郭を仕切、二之郭ニも小仕切ニ郭を仕切置候へハ、譬へ敵何れ之郭を破り乗り取候而も外之郭押廻る事難成候、則如此を城節制と申候、其地形縄張之巧なる事限りも無之候、わつか五十騎一陣ニ組直んと三百五十人も浮たる御人数出来いたし候事歎敷奉存候、尤古も寄合・手明組、或ハ惣軍勢など、名付候戦闘之事不関ハ信玄などの様なる大人数ニ而軍をする時ハ遊兵も有へき事ニ候、只見物して居候備故ニ見物備と申候、是ハ何様なれハ譬ハ碁を打、将碁をさし候ニ打時ハ能手も見へ不申候得共、其事ニ不関して外ニ見物して居る時ハおもひ之外ニ能手もみゆるものなれハ、大人数之上ニあるへき事也 公義ニ寄合組之類有之候故ニ如此寄合組出来致し候哉 公義ハ日本国中之大名を前後左右とあそはされ、御旗本八万之御人数と申候へハ寄合組・見物組之類もなくてハならぬ事も有へく候へとも、御家之御人数位ニ而中々遊軍勢・手明勢・寄合組之類ハ相成不申事ニ候、とかく手組をよくいたし候而備変ニ至而ハ分合を能いたし不申候而ハ難成儀かとも奉存候

- *1 名古屋市役所編纂『名古屋市史』人物編2（川瀬書店、1934年）。
- *2 愛知県図書館貴重和書デジタルライブラリー
（<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/35.html>）
- *3 名古屋市役所著作兼発行『名古屋市史』政治編2（1915年）。
- *4 「徂徠先生答問書解題」（今中寛司・奈良本辰也編『荻生徂徠全集』6〈河出書房新社、1973年〉668～671頁）
- *5 同上。
- *6 『荻生徂徠全集』6 190～191頁。
- *7 「藩士名寄」(徳川林政史研究所所蔵)長野鍋吉条。
- *8 「藩士名寄」竹中内膳条。
- *9 村山孚訳『中国の思想（10）孫子・呉子』（徳間書店、1965年）34～36頁。
- *10 有馬成輔監修・石岡久夫編集『日本兵法全書』1 甲州流兵法（人物往来社、1967年）179頁。
- *11 「有馬一件ニ付御郡預候面々より差出候覚書」『部分御旧記』軍事部12（『熊本県史料』近世編3〈熊本県、1965年〉287～291頁）。